

## 公開講演会記録

シルクロード最大の謎  
「楼蘭」

東京藝術大学特任教授、元NHK新シルクロード・プロデューサー 井上隆史

## 謎の王国・楼蘭

タクラマカン砂漠は、日本列島の面積の90%もある巨大な砂漠だ。それがユーラシア大陸のど真ん中にあるのだから、ちょっと日本的な間尺を変えないと理解できないかもしれない。

中国の北京から西に向かう飛行機で、シルクロードの拠点都市である新疆ウイグル自治区のウルムチに向かうとき、窓から見える風景を表現するとすれば「凄まじい」のひとことしかない。4時間近くのフライトの間、目に飛び込んでくるのは、薄茶色の乾燥した大地ばかりなのである。ときどき集落やオアシスのような町が見えてくるが、人口密度という点

で見ると極端な「疎」であろう。世界のいろいろな地域を旅しているが、これほど人気（ひとけ）のない路線はない。しかし、考えてみると、飛行航路はタクラマカン砂漠の縁をかすめているだけで、本当の大砂漠は見えていないのだ。

この枯れた大地の、まだその向こうに、広大なタクラマカン砂漠が広がっているのだから、呆れるばかりだ。

何度かシルクロードに通ううちに、ふと思うようになった。昔からシルクロードは、こんなに砂漠ばかりだったのだろうか。シルクロードの古代環境は、今と同じだったのだろうか。それとも、今からはまったく想像のつかない姿だったのか。張騫が月氏に使いしたとき、玄奘三蔵が経典を求めてインドに向かったと



【楼蘭故城】



き、シルクロードはどんな表情で彼らを迎えたのか……。

タクラマカン砂漠の砂の海に佇む「楼蘭古城」は、20世紀の初めスウェーデンの探検家スヴェン・ヘディンと、イギリスのスタイン隊によってほぼ同じ時期に発見されたといわれている。

「幻の王国・楼蘭」の都の跡だとの説もあり、その発見以来多くの人を惹きつけてやまない。

## 小河墓遺跡の王宮

その楼蘭古城から西におよそ170キロメートルの地に、「今世紀最大の発見」として話題になったタクラマカン砂漠の遺跡がある。私たちが制作したNHKスペシャル「新シルクロード」でも放送したので、ご存じの向きも多いかと思う。

この「楼蘭・小河墓」の発掘は、今世紀に入ってから予備調査が行われ、大きな成果を上げている。数体の保存状態のいいミイラや、その傍らに埋葬された等身大の「木のミイラ」、舟形の木棺、胡楊の木で作った人間の形をしたトーマボールのような柱などなど、これまでこの砂漠のなかの、そしてシルクロードのどんな遺跡からも発見されたことのない

貴重な出土品が見つかっている。それも、時代はおよそ3千年から4千年前と推定されている。もしかしたら彼らは、このタクラマカン砂漠にはじめて住みつき、古代文明を育んだ人々かもしれないのだ。

発見されたミイラは、すべてコーカソイド、いわゆる白人種である。彫りの深い顔立ち、亜麻色の髪の毛、白い肌……。正確なDNA鑑定はまだ行われていないが、黒海もしくは地中海沿岸をその源とするヨーロッパ人種であると推定されている。

小河墓は、かつてシルクロードに栄えた楼蘭王国の領域内にある。しかし、時代は1千年以上も遡る。楼蘭王国を創った人々と小河墓に眠るミイラたちの間には関係があるのか、それともまったく断絶しているのか、調査がはじまったばかりの今の時点では、何ともいえないが、ミイラや出土品のDNA鑑定などの結果がそろった暁には、そのあたりも明確になるはずだ。

ともあれ、今の時点では、楼蘭王国の「楼蘭人」に対して、仮に彼ら小河墓に眠る人たちを「古楼蘭人」と呼んでおきたい。何よりその言葉の響きがいい。

2004年に小河墓の発掘隊長をつと

める新疆ウイグル自治区文物考古研究所のイディリス・アブドゥラスル所長にウルムチで会ったとき、彼は、この「小河墓」には千に近いミイラが眠っているといった。

「小河墓では予備調査で、すでに4基の棺が見つかっている。少なくとも、あとまだ996基残っている。ゆっくりやるさ。シルクロード最大の発掘となるかもしれないからね」と笑いながら話すイディリス所長の自信にあふれた笑顔が忘れられない。

実は「小河墓」は新しい発見ではない。1934年にシルクロード探検の先駆者であるスウェーデン人スヴェン・ヘディンの直弟子フォルケ・ベリイマンが遺跡を見つけ、4体のミイラを掘り出しているのだ。

スウェーデンに残るベリイマンの記録からわかる発見のいきさつは次のようだった。

あるとき、ベリイマンは、ガイドのウイグル人エルデクから、砂漠のなかの不思議な遺跡の話聞いた。エルデクはヘディンが楼蘭王国の遺跡を見つけたとき、案内役として同行したウイグル人の長老である。ヘディンの信頼は厚く、地元の地理やウイグルの言い伝えに人一倍詳しく

かった。

エルデクが話す不思議な墓の存在にベリイマンは勇みたった。

「その不思議な墓に行ってみよう」。

しかしエルデクは、とんでもないと首を振る。

「あそこには魔物が棲んでいる。行った者は呪いを受けて2度と帰って来られない」。

結局、ベリイマンは嫌がるエルデクを何とか説き伏せ、2人で不思議な墓を目指すことになり、カヌーで川に乗り出した。今は乾いた河床をあらわにしている小河も、当時は豊かな水の流れを誇っていたのだ。

砂漠をさまようこと1か月、ベリイマンとエルデクの2人は砂漠を縫って流れる1本の河をカヌーで下っていき、ついにその遺跡を見つけた。

ヘディン、分遣隊として派遣したベリイマンの報告を聞き、ベリイマンとエルデクが砂漠のなかに見つけた集団墓地を「エルデクのネクロポール（死者の町）」と名づけている。

ベリイマンの報告を受けたヘディンは、この遺跡に大きな関心を寄せた。それは、前掲の記述からも明らかだ。ヘディンは特別の許可を得て、この集

団墓地からの出土品をスウェーデンに持ち帰っている。

しかし時節は風雲急を告げていた。

ヘディンが『さまよえる湖』と題した探検行の記録を出版した1937年、廬溝橋の1発の銃声ではじまった日中の泥沼の戦いは拡大の一途をたどっていく。同じころヨーロッパではナチスドイツが勢力を増しポーランドに侵攻、第2次世界大戦への道を突き進んでいた。

そして何年にも及ぶ戦いと新中国の成立やその後の混乱のなかで、シルクロードの何もない砂漠のなかにたえず「不思議な墓」のことは、いつしか人々に忘れられていったのである。

今のような衛星写真もなかったし、わざわざ砂漠を飛ぶ飛行機も少なかったに



【小河墓遺跡を遠望する】

違いない。タクラマカン砂漠は日本の面積の90%の広さを持つことは冒頭にも書いたが、ほとんど目印らしい目印もない広大な砂漠で、1つの遺跡が「行方不明になる」ことは決して珍しいことではないだろう。

「小河墓」の再発見は2000年の12月のことだった。石油探査のためにタクラマカン砂漠に足を踏み入れた人たちが、偶然発見して文物局に連絡したのだ。

こうして、長く忘れられた存在となっていた遺跡が、再び脚光を浴びることになったのである。

## 白人だった「楼蘭の美女」

1980年に放送された「シルクロード」で一躍脚光を浴びた「楼蘭の美女」をご存じだろう。発見されたときは楼蘭王国の時代に生きた女性と思われるが、のちの調査で紀元前1800年ころに生きた人だと修正された。そして人種もコーカソイドだというのだ。楼蘭の美女は白人だったのである。

ベリイマンの調査でも、再発見後の予備調査でも、見つかったミイラの容貌は、どう見ても、最初の「シルクロード取材」で見つかったあの「楼蘭の美女」と同じ

く、コーカソイド系、つまり白人の特徴を示している。新しい遺跡の発見が、「共産党的解説」を抜きにストレートに伝われば、くすぶりはじめていた新疆ウイグル自治区の民族運動の引き金になることは十分に考えられた。

このとき、私の目の前に浮かび上がった謎の墓は、砂漠の蜃気楼のように消えてしまった。しかし、このとき以来「小河墓」のことは、私の頭から離れなかったのである。

「楼蘭」といえば、敦煌と並ぶシルクロードの代名詞だ。井上靖の小説『楼蘭』の影響か、次々とロマンチックなイメージが湧き上がってくる。

しかし、かつての楼蘭王国の領域に含まれるとはいえ「小河墓」といわれてもピンとこない人が多いに違いない。

半世紀以上発掘が手つかずだったこともあり、これまでに一般にはほとんど知られていない遺跡だ。しかし、今世紀になってはじまった「小河墓」の発掘は、シルクロード研究にとって、きわめて大きな意味を持つ。

それはここに眠る人たちが、もしかしたら、ユーラシア大陸の西から何千キロメートルもの道をたどって、タクラマカン砂漠にやってきた最初の住民かもしれないから

なのだ。それも4千年もの昔に――。

「彼らはいったい何者なのか？」

「どこから、やってきたのか？」

「そのとき、ここは砂漠だったのか？」

「それとも、今とは比べものにならないほど豊かな水と緑に恵まれたオアシスだったのか？」……

次々と謎が浮かんでくる。そして最大の謎は、「小河墓」に眠る人々は、のちの楼蘭王国の人たちと、どんな関係にあるのか……？

謎に満ちた楼蘭王国の実像を解き明かすためにも、「小河遺跡」の発掘調査は大きな期待を集めている。シルクロード最大の謎を解くキー・ストーンがここに埋まっているかもしれないのだ。

### ついに「小河墓発掘」撮影に成功

発掘調査は2003年末から2005年春まで2度にわたって行われることになった。粘り強い交渉の末、われわれの中国人スタッフが調査団の一員になって、現地に入ることが許された。

結局、小河遺跡発掘の一部始終は、私たちが預けたハイビジョンカメラで、NHKが契約した中国人カメラマン毛継東



【小河墓に林立する墓標】

君が克明に記録してくれたのだが、残念ながら外国人の私たちが発掘現場に立ちあうことは、最後まで難しかった。「中国の考古学調査は中国人の手で……」。

経済成長と一種のナショナリズムの高揚のせいもあってか、このところ中国各地で行われている考古学調査の主導権は中国の学者にゆだねられるようになってきた。これもまた、今という時代を反映している。

欧米列強が壁画を剥ぎ取り、ミイラを本国に運び去っていく時代は、とうの昔に終わっていた。

中国の調査隊による小河墓の発掘は素晴らしい成果を上げた。

「すごい遺跡です。ミイラが次々と見つかっています」。

衛星電話を使って、報告をしってくるカメラマンの毛君の声は興奮から上ずっていた。

当然のことながら、撮影された映像は強烈なインパクトがあった。何しろ、その「不思議な墓」からは、期待に違わず、ほぼ完全に保存された4千年近く前の白人ミイラが次々と見つかったのだから……。

その埋葬様式も独特のものであった。

砂の上に直接遺体を置き、胡楊の木で造った舟形の棺を、伏せたように被せていた。その上を、血の滴る剥いだばかりの牡牛の生皮で覆う。「血糊」——まさに血が糊になって棺は密封されていた。

死者の枕辺にはそれぞれ墓標のようなものが立っている。

女性の棺の前に立てられた柱状の墓標は、高さが1メートル50センチから1メートル80センチで、形状はさまざまである。先端はどれも赤く塗られ、毛糸がぐるぐると巻きつけられている。

男性が眠る棺の頭部に立てられているのは軍配のような墓標だ。ほとんどはげ落ちていたが黒い塗料が残っているのが確認できる。

この軍配状と柱状の墓標はいったい何

を意味しているのか？

研究者によると軍配のような墓標は女性性を、柱状の立木は男性性をそれぞれ象徴しているのだという。つまり、男性ミイラには女性性を模した軍配のような墓標、女性ミイラの頭の部分にはポール型の墓標がセットになって、立てられているのだ。

小河墓地がつくられた時代、人々は生殖崇拜の観念を持ち、多産を願ってこのような埋葬形式を取ったのではないかと研究者は考えているようだ。

墓標や棺、立木のように屹立する柱は砂漠に多い胡楊の木でできていた。その頂には牛の頭がくりつけられていた。

\* 映像を見た専門家が、この牛は頭骨の形から見て、インダスの牛ではないかと意見をいつてきたが、これは今後のDNA鑑定などの調査報告を待たなければならない。

確実にいえることは、こんな埋葬様式は、シルクロードのどこでもまだ見つからないいきわめて珍しい様式だということだ。

## 見つけた「美女」ミイラ

小河墓発掘の白眉は、何といっても



【発掘されたばかりの小河美女】

「新楼蘭の美女」とも呼ばれた「小河美女Ⅱ M11」の発見だ。棺を覆う牛の皮をはぎ取り、船の底板に当てる蓋を

外したとき、そこには今にも息を吹き返して起き上がってくるようにさえ思える人形のような美女ミイラが眠っていた。

20代と見える若い女性だった。フェルトの帽子を深くかぶり、亜麻色の長い髪、彫りの深い貌、高

深い貌、高



【鑑定調査中のM11＝小河美女】

い鼻梁、薄い唇……うっすらと死に化粧が施され、目にはつけ睫毛かと思われるほどの長いまつげが残っていた。DNA鑑定を待つまでもなく、その容貌は明らかにコーカソイド、つまり白人系であることを示していた。

「小河美女ⅡM11」の美女ミイラは発掘が終わって行われたDNA鑑定によって、時代は「楼蘭の美女」とほぼ同じ時代と判定された。

このM11をはじめ、小河墓ではかなりの数のミイラが良好な保存状態で見つっている。砂の他にも何か特別な保存方法が講じられていたのかもしれない。

### 小河墓のミイラは中国最古だった

調査で出土したミイラは、全部で145体。いずれも「ミイラⅡ干屍」であり、エジプトのミイラのように、人為的処理をくわえてつくられたものではなく、自然に乾燥したものである。内訳は男性54体、女性79体、性別不明12体。そのなかに子どものミイラが19体あったという。

南区の墓葬は、時代順に5層に分かれていることが判明した。一番表層の第1層からは13基、その下の第2層から27基、第3層から23基が発見された。炭素14の

崩壊による年代測定の結果、1〜3層の絶対年代は紀元前1450〜1700年と分かった。

第3層の下は約1メートルの砂が堆積し、その下に第4層があり、38基の墓葬が発見された。さらにその下には最下層の第5層があり、やはり38基の墓葬が確認された。これを炭素14により年代測定すると、紀元前1700年から2000年であることが判明したという。

これまで中国で発見された最古のミイラは「楼蘭の美女」だといわれていた。「楼蘭の美女」は紀元前1800年とされているので、小河墓の最下層から出土したミイラは中国最古のミイラである可能性が出てきた。

彼らは、タクラマカン砂漠に最初の文明をもたらした人たちかもしれない。彼らはどこからやってきたのか。どんな社会を築いていたのか。小河墓の発掘によって、シルクロードの大きな謎が、またひとつ浮かび上がってきた。

小河墓遺跡や鉄板河遺跡など、楼蘭周辺で見つかった「古楼蘭人」のミイラとその遺物、遺跡の研究によって、おそらくはこれまでの常識を覆すほど、大規模でダイナミックなユーラシアの民族移動の姿が浮かび上がってくるはずだ。

### 小河墓への旅

発掘が終了して約1か月後の2005年4月、私が客員教授をやっていた日本の総合地球環境学研究所と新疆文物局との間で共同研究をはじめることになり、日本人研究者とともに、小河墓視察を認めるとの連絡があった。

小河墓行きは、4年越しの念願だった。「一度は現地を見てみたい」という思いが人一倍強かったのも事実であり、そのことを新疆側はよく知っていた。その思いがやっと通じたのか、新疆からの突然の小河墓行き招待だった。

発掘が終わったので、今度は小河墓の公開に向けての準備をはじめた。私たちが、その最初のゲストだという。こうして「貴重な文化遺産」は、「貴重な観光資源」に変わっていく。中国らしい切り替え方だ。

やっと巡ってきたチャンスを逃す手はない。そこでゴールデンウィークの休暇を利用して、小河墓への旅に参加することにした。同行したのは京都の総合地球環境学研究所の佐藤洋一郎教授、岡山大学農学部に加藤鎌司助教授、いずれもDNA考古学や植物学の専門家だ。案内は

イディリス新疆文物考古研究所長と新疆文物局の李軍副局長、通訳の劉豆君というメンバーだった。

4月の終わり、私たちは小河墓遺跡に向かつて、砂漠のなかを走っていた。小河墓遺跡は幹線道路から36キロメートルも砂漠のなかを走って行かなければならない。砂地にしっかりと根を下ろし、緑の枝をいっぱいに広げた胡楊の林が切れると、タマリスクコーンの奇妙な風景が続く。タマリスクは砂漠に強い、丈の低い植物で小さな叢になる。枯れたあとでも、深く下ろした根の周りに砂が吹き溜まり、小さな丘を造る。これをタマリスクコーンと呼ぶ。枯れた枝や根っこが、まるで前衛の華道家がつくったオブジェのように、不気味な姿を晒している。農民たちはこの枯れたタマリスクの枝や根を採って薪にするのだが、そのときに偶然遺跡や遺物を掘り当てることもあるという。

砂の海を3時間も走ると、やがて砂だけの世界になってきた。風の吹き来る方向を背に、クロワッサンのような形の大きな砂紋が続いている風景は壮観だ。ヘリで上空から撮影した映像を見ると、まるで巨大な魚の鱗のようにも思えた。まさに、風と砂の芸術だ。



【遺跡の手前で砂に埋まったトラック】

しかし、「暑い」……。

4月だというのに、手元の温度計を見ると、優に30度を超えている。もう1か月もすると、地表温度は40度にも50度にもなるといふ。夏の盛りに砂漠に入るのは無謀というものだろう。

砂漠用のベンツ製のトラックは何度も砂に車輪が埋もれ動けなくなった。1台が砂に捕まるともう1台がワイヤーで引くのだ。常に2台以上のトラックで行動しないと、灼熱の砂漠の真ん中で立ち往生という羽目になる。

砂漠の太陽が西に傾きはじめ、砂のエッジの描く影が長くなりはじめたころ、前方に小河墓が見えてきた。胡楊の柱が林のように立つ姿は変わらないが、発掘が終わった小河墓は、砂の丘が削られ、映像で見たより低く、小さくなっていた。遺跡の周辺を取り巻くように、数キロにわたって、鉄条網が見える。まだ一部では作業員が集まって、鉄条網を張る作業が続いていた。

こうして鉄条網で遺跡を囲んだあと、盗掘で遺跡が荒らされないように、2人の監視員が常駐するという。自家発電でクーラーも動くのだが、60度近くにまでなるという灼熱の砂漠の真ん中で男2人きりで過ごす夏は、さぞや過酷な日々となることであろう。

われわれの宿舎は、砂漠のなかを運んできたバスを改造した臨時の「小河賓館」だった。数組の2段ベッドが置かれていて、全員がここで寝るのだという。それぞれに割り当てられたベッドに荷物を置いて、まずは小河墓に向かった。

青空に聳える胡楊の柱は、やはり異様だ。低い丘を登ると一面に並ぶ棺が見える。5層になっていた集団墓地を掘り進み、最下層だけを残したのだという。枕元に丸い柱の墓標や、軍配のような

墓標を立てて、舟形の棺が並ぶ様は、まるで砂の海を押し進む船団のようにも見える。舳先はどれも、風の吹きくる北東に向かっている。

傾いた太陽から届く斜光が胡楊の影を長く砂地に伸ばしている。

感動的だった。

映像を見るだけではわからない、五感に訴えてくる「何か」が現場にはある。西の地平線に沈みはじめた太陽の柔らかな光。乾いた砂の手触り。夕方になって急に冷え込んだ大気が肌を掃く。遠くから響く自家発電機の大自然には不似合いな音に、隊員たちが可愛がっているシェパード犬の低く唸る声が重なる。

小河墓の上から周囲を眺めてみた。見渡す限りの砂の海だ。そのなかに林立する胡楊の柱は、やはり異様に見える。

小河墓の棺を1つ造るのに3本の胡楊の大木が必要だとイディリス所長が教えてくれた。その胡楊はどこから運ばれてきたのか？これだけの棺と柱と墓標を造るには、かなりの本数の胡楊が必要だったはずだ。

小河墓が造られた時代、この辺り一帯の環境は、今とは大きく異なっていたに違いない。豊かな水量を湛えた河が流れ、胡楊の林が生い茂るオアシス。そのなか

に島のように浮かぶ小河墓の往時の姿が脳裏に浮かんた。

集団墓地の墓標や棺の表面はみごとに削り上げられている。柱には「ほぞ」のような切り込みもされていて、鋭利な道具が使われたことがわかる。青銅器を使ったのか、すでに鉄器を知っていたのか。しかし、不思議なことに、この集団墓地からは、金属器はひとつも発見されていない。ただ小さなコインのような形の青銅が、シャーマンではないかと推定された老女のミイラの衣装に縫い込まれていたことから、彼らが「青銅文化」を知っていたことは証明されている。

この小河墓は、祭祀と一族の永遠の眠りの場所であって、この近くには生活の場は見つかっていないという。彼らが生活を営んだ集落は、ここから離れたところにあったに違いない。

もしかしたら、舟で小河の流れに乗って、ここに、死者を埋葬しにやってきたのかもしれない。

### 小麦のDNAが語る

太陽が砂漠に沈み、あたり一帯が暗くなると、東の地平線から、十六夜の月が昇ってきた。ちょっと歪んだような顔の



【小麦の入った草編みの籠】

月は、満月より愛嬌がある。たった一晩だけ許された砂漠の夜に、小河墓の柱に懸かる明るい月が情感を与えてくれる。残念なのは、月明かりのおかげで、降るような星空が見えないことだが……。少し青みを帯びた月の光は、私たちを太古の昔に誘ってくれるようだ。

夕食のあと、同行の新疆文物考古研究所のイディリス所長に発掘の成果を聞いた。盗掘され、砂上に放置されていた棺も含めて、357基の墓が確認できたという。地元のウイグル人たちが呼びならわしていた「千の棺の眠る墓」とまではいかないが、こうした集団墓地で、ほぼ完全な形で大量のミイラが見つかるのは、世界でもほとんど例がないとイディリス所長は強調した。

膨大な数のミイラの発掘だけでも世界的ニュースである。しかし、小河墓で発見されたのはミイラだけではない。実は私たちの小河墓行きの最大の目的は、ミイラと一緒に見つかった「もの」にあった。

棺に納められていたミイラは、必ず傍らに小さな草編みの「籠」を携えていた。籠のなかには穀物の種が入っていた。小麦である。

小麦は種籾の状態だった。それも映像で見るかぎり、保存状態はきわめて良好である。炭化もしていなかった。こんな乾燥地ではほぼ完璧な状態で保存されていることに、今回同行した佐藤教授たち専門家も驚いていた。はじめて映像を見せたとき、彼らは一様に歓喜の声を上げた。「この状態なら小麦のDNAが、確実に抽出できますよ」。

じつはこの小麦、中国で見つかった最古のものである可能性があるのだ。

DNA鑑定に成功すれば、この小麦の系譜と伝播ルートの解明、さらには、灌漑農法でつくられたものか、天水だけを使っていたのか、といったことまで解明できるという。

小麦のふるさとトルコのアナトリアである。小麦はやがてチグリス・ユーフ

ラテス河の畔<sup>ほとり</sup>に運ばれ、人類最古といわれる「メソポタミア文明」を生んだ。

そして西のヨーロッパ、東の中国へと広がっていく。小麦伝播の道「小麦ロード」のミッシングリングがつながるかもしれないのだ。

しかし、4千年近く前の小麦が、この状態で残ること自体、奇跡的だともいえる。きつと、タクラマカンの砂に何か秘密が隠されているに違いないとさえ思えた。

## 楼蘭・空白の千年

タクラマカン砂漠には、まだまだ多くの「謎」が眠っている。その謎のなかで最大のものが「楼蘭の謎」だという。

小河墓の調査は、この集団墓地がつくられてから、1千年以上経って、歴史のなかに忽然と現れた謎の王国「楼蘭」の住人、いわゆる「楼蘭人」の出自や民族を解明する重要な手がかりとなるかもしれない。小河墓や楼蘭故城の近く鉄板河遺跡で発見されたいわゆる「楼蘭の美女」などのミイラの年代は、年代測定によると紀元前1500年〜2000年ころとみられている。

一方、楼蘭王国が史書に登場するのは

紀元前2世紀である。楼蘭王国がいつ成立したかについては明らかではないが、どんなに遡っても数百年だろう。小河墓遺跡の時代と楼蘭王国の間には1千年以上のタイムラグがあるのだ。

この1千年の間、楼蘭一帯には誰も住んでいなかったのか？ それならば「古楼蘭人」はいつ、どこに消えたのか？

楼蘭で見つかった焼土層は、何か大きな事件があったことを物語っているように思えた。

探れば探るほど謎が深まる——それが楼蘭の魅力でもある。

(2019年1月24日・公開フォーラム)

## 筆者略歴(いのうえ たかし)

1952年7月26日生まれ。香川県丸亀市出身。「歴史への招待」などのディレクターとして主に歴史番組を担当。プロデューサーとして文明・歴史・美術に関連するNHKスペシャルなどの特集番組、大型シリーズ番組の制作に携わってきた。代表作「大黄河」「大モンゴル」「中国12億人の改革開放」「家族の肖像」「四大文明」「新シルクロード」など。